

基礎看護学一日実習の効果と位置づけの検討 —実習記録の内容分析を通して (Part II) —

小野 晴子 杉本 幸枝
土井 英子 三宅真由美*

基礎看護学

Effects of One-day Fundamental Nursing Practice in a Hospital and Study of the proper Perspective
—A Content Analysis of Practice Record of Student (Part II)—

Haruko ONO Yukie SUGIMOTO
Hideko DOI Mayumi MIYAKE
(2001年11月1日受理)

本学では平成8年から入院患者の生活状況を知る目的で「基礎看護学一日実習」を実施している。筆者らは¹⁾、その効果と課題について分析した。今回は、その課題を踏まえ、直接患者と関わりがもてるように実習計画の変更を行いその効果を検証した。その結果、学生は看護婦の一举一動を捉えて「看護婦の魅力と役割」を認識し、患者と直接話すことで「辛い治療に耐えている患者」の心理を推察するなど学習効果が高いことがわかった。

そこで、基礎看護学一日実習を、講義や演習で学んだ知識・技術を理解から問題解決へと転移するための基礎看護学の科目に位置づける必要性が明確となった。

はじめに

基礎看護学教育において初期段階での臨地実習は今や必要不可欠となり、各教育機関でさまざまな取り組みがなされ、その効果の報告も多い^{2),3)}。

筆者らは、先行研究¹⁾(以下前回と称す)の基礎看護学一日実習(以下一日実習と称す)の効果について調査を実施し、学生にとって講義・演習が現実の看護と関連づけられるなど学習効果が得られることを報告した。

課題として、「看護の仕事は汚い」や「看護の

現実にショックを受け」ていたり、「本当に自分が看護婦になれるのか不安」という否定的意見が見られた。

また、実習記録から患者の記述が少ないなど、患者—看護婦関係から患者を理解しようとしている学生像が捉えられた。そのために、患者との直接的接触を考慮した実習計画の工夫が必要となった。

さらに、学生の一実習の全体像を明確にすることにより、基礎看護学実習全体の位置づけを論議し、イメージ化を行った。そして、一日実習を基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱや領域実習につながるもの

*新見公立短期大学非常勤助手

に位置づけたいと考えた。

そこで、本研究では前回の課題であった患者との関わりを間接的ではなく直接的に関わり、患者の生活像を捉えられる実習目標及び実習内容に変更して一日実習を実施した。

学生はすべてが初めての経験で、短時間ではあるが患者との新鮮で感動的な出会いを体験している。その学びを実習記録から分析し、一日実習を基礎看護学の科目に位置づけることを検討した。

1. 研究目的

基礎看護学一日実習の実習目標及び実習方法の変更後の意義と効果を明らかにし、基礎看護学として位置づけるための再考とする。

II. 研究方法

1. 対象：平成13年度本学看護学科入学生で一日実習に出席した学生61名。
2. 方法：実習終了後に提出された所定の看護実習記録の「感想」の自由記載欄の学びを抽出し、抽出したデータを内容分析した。内容の分析は、研究者間で検討した。
3. 研究期間：平成13年6月14日～9月18日
4. 倫理的配慮：実習終了後の実習記録提出後に学生に研究の趣旨を説明し同意を得た。

III. 基礎看護学の科目目標と一日実習との関連

1. 基礎看護学の科目目標

基礎看護学は、看護の対象である人間理解の基礎となる科目で看護学概論・援助技術論・臨床看護学総論の3本柱として教授している。

看護学概論Iでは、看護の基本的概念を理解し、専門職としての看護の本質を追求するための基礎能力を養うことを目的としている。

援助技術論IIの目的には、対象の日常生活上の健康問題を理解し、専門的に援助するための実践能力を養うことを目的に展開している。

2. 基礎看護学一日実習の目標

- 1) 対象と直接的・間接的に関わることにより、看護の対象となる人とその生活状況を知る。
(前回の目標は、①入院患者と接することで看護の対象となる人とその生活状況を知るであった。)
- 2) 対象の生活を取り巻く環境について知る。
- 3) 看護の場における対象と看護者の援助関係について知る。
- 4) 病院の機能について考える。

3. 基礎看護学の進捗と一日実習との関連

1) 看護学概論I (図1)

看護を学ぶにあたって、先ず最初に看護とはな

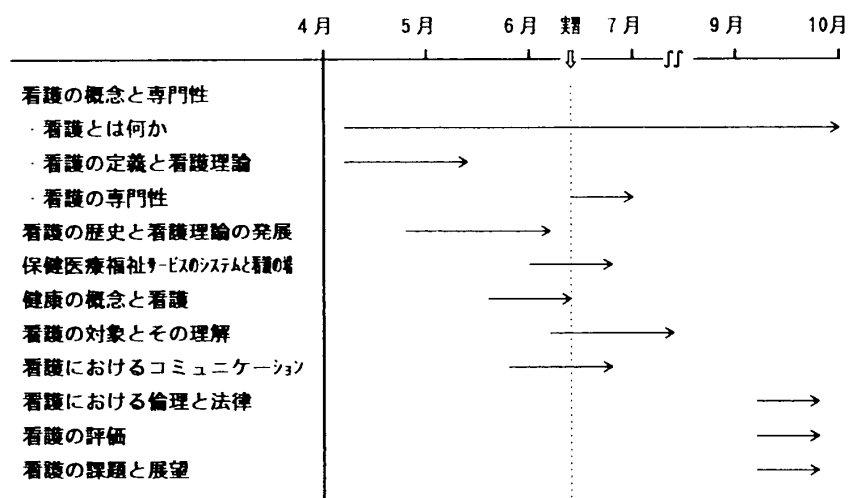


図1. 看護学概論Iの進捗表

にかを考え、各単元毎に自己に問いかける機会としている。そのために看護の定義や看護理論を履修し、看護の歴史で社会とともに歩んだ看護の変遷をたどりながら看護とはなにかを学習することになっている。従って、一日実習までの進捗としては、まだ基礎看護学の導入段階といえる。

2) 援助技術論II (図2)

援助技術とはなにか、なぜ援助技術を学ぶのかを考え、講義と演習によって自らの身体を通して学習している。本学では、援助技術論ワークブック⁴⁾を活用して授業を展開している。学習内容としては、安全・安楽、環境の調整、ボディメカニクスの講義の後、演習による身体の動かし方、安楽な体位、ベッドメイキングやリネン交換、移動の援助を実施し、一日実習に臨んでいる。

4. 基礎看護学一日実習の経緯と現状

当初は特別活動の一貫とした施設見学だったが次第に見学実習となり、現在の一日実習となった。前回⁵⁾その評価を実施した。その結果、患者との関わりが少ないこと、看護に対する否定的意

見があったことが課題となった。そこで今回、実習目標及び実習内容の変更を行い一日実習を実施した。

その実習方法は、①K実習病院との事前打ち合わせを1回目は4月に、2回目を5月に実施した。各病棟指導者に、実習目的・目標・実習方法・科目の進捗状況を説明。②実習日は、平成13年6月14日。実習時間は、午前8時30分から午後3時30分まで。午後の時間に、学生だけで患者と直接関わる時間を20分程度もてるようにした。

③1名の学生に病棟看護婦1名の指導体制のもと、1病棟に学生3～5名を配置した。実習病棟は全体で17病棟だった。

IV. 結 果

1. 一日実習体験の内容分析 (表1)

一日実習での体験内容を分析した結果、66コードを抽出した。それを23項目のサブカテゴリーに分類し、さらに11項目のカテゴリーに類型化された。

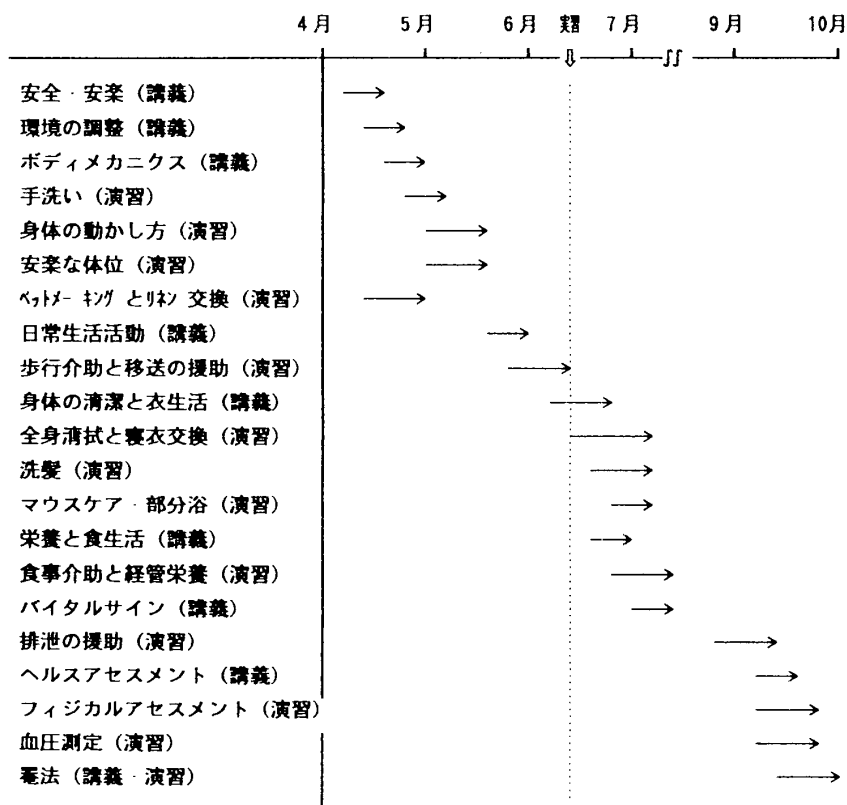


図2. 援助技術論IIの進捗数

表1. 基礎看護学一日実習記録の感想の内容分析

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
自分なんて看護婦の卵とも言えないような未熟なものだと思った(5) 基礎的な知識をつけることがとても大切(3) 看護婦や患者と接することで大きな刺激を受け看護に対する考え方が見えてきた気がする(5) 今回の経験を生かし、勉強したい(14) 自分自身が勉強しないといけないものが見えた(3) 実習の時間が短く感じる充実した実習だった(5) とまどうことも多かった(3) 初めての看護実習でとても緊張もしたけど、楽しかった(9) 初めての実習で疲れたけど、楽しかった(6) 学校での実習とは違う緊張感があり、患者の重みを感じた(5) 清拭の体験をさせてもらうことができたのは、よい経験になった(1) リネン交換と車椅子での移送をさせてもらった(6) いざとなるとできないことが、多くあった(7) 技術が未熟で清拭や車椅子移動がうまくできなかった(3) 車椅子での学習をしたはずなのに生かせなかった(4) 応用させていかなければ、現場では対応しきれないと思った(2) 学校で看護を学ぶのと実際とは随分と違った 今学んでいることは重要で、援助の基本であると実感できた(3) 病院でないとわからないこともありよかった(3) 看護婦から、患者との信頼関係の築き方の指導を受けた(3) 看護婦が優しく指導や説明をして下さった(7) 患者とコミュニケーションを取るのが難しかった(14) 言葉が通じることの難しい患者がいた(2) コミュニケーションを取る事の大切さがわかった(2) 看護婦は患者とうまく会話していた(4) 看護婦は笑顔で、患者との会話を楽しんでおられ、患者も心を通わせている(10) 患者は看護婦と会話している時、とてもうれしそうだった(2) 患者に言われたことがうれしかった(6) 患者と話ができてよかった(4) 心から感謝していると患者が言った(3) 患者の了解を得て、説明し、納得してもらうことの大切さも知った(2) 自然にコミュニケーションが取れるようにしたい(4) 栄養士や薬剤師などいろいろなスタッフがいる(1) 病院は患者のことを配慮した設備になっている(7) 病院の設備について指導してもらった(3) 患者のできる範囲のことは、自分でやってみよう方が患者のためになると思う(1) 寝たきりのイメージが強かったが、ある程度のことはできる患者が多かった(5) 患者は想像もつかないような病気を患っており、つらい治療にも耐えている(3) 患者は入院生活の中でいろいろな不安や悩みを持つてる(4) 患者と接するのはその時々なので、本当に貴重な時間で、大切にしていかなければならない(5) 学内の演習では接することのない患者と接することができた(6) ゆるみかかっていた自分の気持ちが引き締まった(3) 患者の気持ちを察することのできるナースになりたい(3) 患者に慕われる看護婦になりたい(3) 現場の看護婦に近づけるように、少しずつ前進していきたい(13) 白衣とナースキャップの重みを実感できた(2) 看護婦は患者が何を要求しているのかが自然とわかっている(9) 患者の回復には、患者-看護婦の信頼関係はとても重要である(3) プライバシーへの配慮がある(2) 看護とは身体ケアだけでなく、心のケアも大切だ(6) 患者の立場にたって、物事を考えることが必要だ(4) 患者の状態をよく把握して、患者の安全を一番に考えなければならないということを学んだ(5) 患者の部屋に行く前には、必ず手洗いをするべきだ(2) 看護婦はたいへんな仕事だ(4) 看護婦は速歩きだった(8) 看護婦の実際の仕事を知った(9) 看護という職業はやりがいのあるものだ(8) 看護という仕事にますます魅力を感じた(3) ミスをなくすために、細心の注意が払われている(10) 看護婦という仕事は責任がある仕事だ(3) 看護者の適切な判断、テキパキした行動には驚いた(6) 看護婦は親やかで笑顔がステキだった(2) 看護婦の患者への気配りや、患者の気持ちなど看護の意味に気付いた(2) 生き生きとした顔で患者と話している看護婦は、すごい(2) カンファレンスでは患者のことを話し合うために自分の意見を持って言え、また聴くことができる(7) 申し送りやカルテは患者の情報がつまっていて、とても大切なものだ(3)	自分自身が勉強しないといけないものが見えた 初めての看護実習でとても緊張もしたけど、充実した実習だった 清拭や車椅子移動がうまくできなかったが、良い経験になった 学校で看護を学ぶのと実際とは随分と違った 看護婦が優しく指導や、説明をして下さった 患者とコミュニケーションを取るのが難しかった コミュニケーションを取る事の大切さがわかった 患者と話ができてよかった 自然にコミュニケーションが取れるようにしたい 栄養士や薬剤師などいろいろなスタッフがいる 病院は患者のことを配慮した設備になっている ある程度のことはできる患者が多く、してもらったほうが良い 患者は不安や悩みを持ち、辛い治療にも耐えている 学内の演習では接することのない患者と接することができた 患者の気持ちを察することのできるナースになりたい 患者-看護婦の信頼関係はとても重要である 患者の安全を一番に考えなければならない 看護婦はたいへんな仕事だ 看護という職業はやりがいのあるものだ 看護婦という仕事は責任がある仕事だ 看護者の適切な判断、テキパキした行動には驚いた カンファレンスでは患者のことを話し合うために自分の意見を持って言え、聴くことができる 申し送りやカルテは患者の情報がつまっていて大切である	学習目標の明確化 緊張と充実の実習 講義と実習との相違の実感 看護婦からの指導 コミュニケーションの体験 チーム医療の実際 配慮のある療養環境 患者像のイメージの変化 患者-看護婦の信頼関係 看護の魅力と役割の認識 カンファレンスによる患者の共通理解

()はコード数

コード名は〈 〉、サブカテゴリー名は《 》、カテゴリーは【 】と表記する。

カテゴリーの内容は【看護の魅力と役割の認識】、【コミュニケーションの体験】、【患者－看護婦の信頼関係】、【講義と実習との相違の実感】、【学習目標の明確化】、【緊張と充実の実習】、【患者像のイメージの変化】、【カンファレンスによる患者の共通理解】、【看護婦からの指導】、【配慮のある療養環境】、【チーム医療の実際】に分類し、研究者間で各カテゴリーの命名を行った。

入学後の初めての一日実習において学生が体験した学びはどのようなことだったのかを、カテゴリー毎に分析した。(表2)

最もコード数の多かったカテゴリーは、【看護の魅力と役割の認識】であった。13のコードと5つのサブカテゴリーから形成された。コードの内容を見ると〈患者の状態をよく把握して患者の安全を一番に考えなければならないということを学んだ〉と〈患者の部屋に行く前には必ず手洗いをすべきだ〉の2つのコードから《患者の安全を一番に考えなければならない》のサブカテゴリーとした。次に〈看護婦は大変な仕事だ〉と〈看護婦は速歩きだった〉、〈看護婦の実際の仕事を知った〉の3つのコードを《看護婦は大変な仕事だ》とサブカテゴリーにした。さらに〈看護という職業はやりがいのあるものだ〉、〈看護という仕事にますます魅力を感じた〉の2つのコードにサブカテゴリーを《看護という職業はやりがいのあるものだ》とした。次に〈ミスをなくすために細心の注意が払われている〉と〈看護婦という仕事は責任がある仕事だ〉の2つのコードで《看護婦という仕事は責任がある仕事だ》をサブカテゴリーと

した。最後に〈看護婦の適切な判断、テキパキとした行動には驚いた〉と〈看護婦は穏やかで笑顔がステキだった〉、〈看護婦の患者への気配りや患者の気持ちなど看護の意味に気づいた〉、〈活き活きとした顔で患者と話している看護婦さんはすごい〉の4つのコードで形成されている。そのサブカテゴリーは《看護者の適切な判断、テキパキとした行動には驚いた》とした。

第2番目にコード数の多かったカテゴリーは、【コミュニケーションの体験】で、4つのサブカテゴリーと11のコードから形成された。その内容は〈患者とコミュニケーションをとるのが難しかった〉、〈言葉を話すことの難しい患者がいた〉の2つのコードで《患者とコミュニケーションをとるのが難しかった》のサブカテゴリーとした。

次に〈看護婦は患者とうまく会話をしていた〉と〈看護婦は笑顔で、患者との会話を楽しんでおられ患者も心を通わせている〉、〈患者は看護婦と会話をしている時とてもうれしそうだった〉の4つのコードで、《コミュニケーションをとることの大切さがわかった》のサブカテゴリーにした。

次に〈患者に言われたことがうれしかった〉〈患者と話ができてよかった〉〈心から感謝していると患者が言った〉の3つのコードを《患者と話ができてよかった》のサブカテゴリーにした。さらに〈患者の了解を得て説明し、納得してもらうことの大切さを知った〉と〈自然にコミュニケーションがとれるようにしたい〉の2つのコードで《自然にコミュニケーションがとれるようにしたい》をサブカテゴリーとした。4つのサブカテゴリーから【コミュニケーションの体験】と命名した。

表2. カテゴリーの類型化

カテゴリー	サブカテゴリー数	コード数	データ数
緊張と充実の実習	1	5	28
講義と実習の相違	2	9	42
学習目標の明確化	1	5	30
コミュニケーションの体験	4	11	53
患者像のイメージ変化	3	6	24
看護婦からの指導	1	2	10
患者－看護婦の信頼関係	2	10	48
看護婦の魅力と役割の認識	5	13	64
カンファレンスの患者の共通理解	2	2	10
チーム医療の実際	1	1	1
配慮ある療養環境	1	2	10
計	23	66	320

第3番目に多かったのは【患者－看護婦の信頼関係】であった。その内容は、〈看護婦は患者が何を要求しているのかが自然とわかっている〉と〈患者の回復には、患者－看護婦の信頼関係はとても重要である〉、〈プライバシーの配慮がある〉、〈看護とは身体ケアだけでなく心のケアも大切だ〉、〈患者の立場にたつて物事を考えることが必要だ〉の5つのコードから《患者－看護婦の信頼関係はとても重要である》とサブカテゴリーとした。

もう一つは〈ゆるみかかっていた自分の気持ち引き締まった〉と〈患者の気持ちを察することのできるナースになりたい〉、〈患者に慕われる看護婦になりたい〉、〈現場の看護婦に近づけるように少しずつ前進していきたい〉、〈白衣とナースキャップの重みを実感できた〉の5つコードを《患者の気持ちを察することのできるナースになりたい》というサブカテゴリーとし、前記のカテゴリーに命名した。

第4番目は9つのコードからカテゴリーを形成している。内容は、〈清拭の体験をさせてもらうことができたのはよい経験になった〉、〈リネン交換と車椅子での移送をやらせてもらった〉、〈いざとなるとできないことが多くあった〉、〈技術が未熟で清拭や車椅子移動がうまくできなかつた〉、〈車椅子での学習をしたはずなのに生かせなかつた〉の5つのコードで《清拭や車椅子移動がうまくできなかつたがよい経験になった》のサブカテゴリーとした。続いて〈応用させていかなければ現場では対応しきれないんだと思った〉、〈学校で看護を学ぶのと実際とは随分と違った〉、〈今、学んでいることは重要で援助の基本となるものであるというのが実感できた〉、〈病院でないとわからないこともあってよかった〉から《学校で看護を学ぶのと実際とは随分と違った》をサブカテゴリーとし、2つのサブカテゴリーから【講義と実習との相違の実感】のカテゴリーと命名した。

第5番目は5つのコードから形成された。その内容は、〈自分なんてまだ看護婦の卵とも言えないような未熟なものだと思った〉と〈基礎的な知識を身につけることがとても大切〉、〈看護婦や患者と接することで大きな刺激を受け看護に対する

考え方が見えてきた気がする〉、〈今回の経験を生かし勉強したい〉、〈自分自身が勉強しないといけないものが見えた〉を《自分自身が勉強しないといけないものが見えた》のサブカテゴリーにした。これを【学習目標の明確化】のカテゴリーとした。

第6番目は5つのコードと1つのサブカテゴリーに形成された。その内容は、〈実習の時間が短く感じる充実した実習だった〉、〈とまどうことも多かった〉、〈初めての看護実習でとても緊張したけれど楽しかった〉、〈初めての看護実習で疲れたけれど楽しかった〉、〈学校での実習とは違う緊張感があり患者さんの重みを感じた〉で、サブカテゴリーを《初めての看護実習でとても緊張したけれど充実した実習だった》とした。このカテゴリーを【緊張と充実の実習】と命名した。

第7番目は、6つのコードから3つのサブカテゴリーが形成された。その内容は、〈患者のできる範囲のことは自分でやらせてもらう方が患者のためになると思った〉、〈寝たきりのイメージが強かったがある程度のことはできる患者が多かった〉の2つのコードで《ある程度のことはできる患者が多く自分でやらせてもらう方がよい》をサブカテゴリーとした。次が〈患者は想像もつかないような病気を患っており辛い治療にも耐えている〉、〈患者さんは入院生活の中でいろんな不安や悩みを持っている〉の2つのコードから《患者さんはいろんな不安や悩みを持ち、辛い治療にも耐えている》とした。〈患者と接するのはその時々なので本当に貴重な時間で大切にしていかなければならない〉、〈学校の演習では接することのない患者と接することができた〉の2つのコードから《学内の演習では接することのない患者と接することができた》をサブカテゴリーとした。この5つのサブカテゴリーから【患者像のイメージの変化】のカテゴリーとした。

第8番目は、2つのコードから2つのサブカテゴリーとなった。〈カンファレンスでは患者のことを話し合うために自分の意見をもって言え、また聞くことができる〉を《カンファレンスでは患者のことを話し合うために自分の意見をもって言え、また聞くことができる》というサブカテゴリー

リーにした。〈申し送りやカルテは患者さんの情報がつまっていたとても大切なもの〉のサブカテゴリーを《申し送りやカルテは患者さんの情報がつまっていたとても大切なものだ》とした。2つのサブカテゴリーから【カンファレンスによる患者の共通理解】とした。

第9番目は、2つのコードと1つのサブカテゴリーで形成した。〈看護婦さんから患者との信頼関係の築き方の指導を受けた〉と〈看護婦さんが優しく指導や説明をしてくださった〉でサブカテゴリーを《看護婦さんが優しく指導や説明をしてくださった》に、カテゴリーは【看護婦からの指導】となった。

第10番目は、【配慮のある療養環境】のカテゴリーで、それは〈病院は患者のことを配慮した施設・設備となっている〉と〈病院の設備について説明をしてもらった〉の2つのコードから《病院は患者のことを配慮した施設・設備となっている》がサブカテゴリーとなった。

最後の第11番目に、【チーム医療の実際】というカテゴリーであった。〈栄養士や薬剤師などいろいろなスタッフが教えている〉のコードから《栄養士や薬剤師などいろいろなスタッフが教えている》をサブカテゴリーとした。

以上11のカテゴリーが類型化された。

V. 考 察

1. 基礎看護学一日実習体験の成果

一日実習から多くの学生が学んだことは、【看護婦の魅力と役割の認識】であった。学生の目に一番に飛び込んできたものは、看護婦の一挙一動から知る看護の仕事である。「患者の安全」を考え、「適切な判断とテキパキした行動」をとり、「責任のいる仕事」である。だからこそ「やりがいのある仕事」だと考えたのだろう。また「看護婦の患者への気配りなど看護の意味に気づいた」など看護とは何かを問いかけている。さらに、「患者の安全」や「責任」、「適切な判断」は看護婦の重要な役割で、そのことにも気づけている。

前回の報告でも、看護という仕事に対する驚異と敬意をもって、その仕事を「やりがいのある仕

事」としている。責任と適切な判断力と行動がとれる看護婦像としてモデリング化している点では前回と同様であった。看護婦として必要な幅広い知識と深い感性、それを十分に発揮する行動力、この3つの要素を見据えている学生の姿がある。わずかな時間でも学生の心を捉えて離さない看護婦像である。看護婦を将来の職業として選択したことの確認として多くの学生に映ったものと考えられる。

次に【コミュニケーションの体験】の記述が多かった。学生は、「患者とコミュニケーションをとるのが難しかった」からこそ「看護婦は患者とうまく会話し」そして「患者は看護婦と会話しているときとても嬉しそう」と看護婦だけでなく、患者の表情をも捉えている。また、学生自身の「患者と話ができてよかった」と素直に喜んでいる。そして「自然にコミュニケーションがとれるようにしたい」とコミュニケーションの発展が読み取れ、一歩ずつ前に進んでいるのがわかる。

前回の報告では、「患者と看護婦の関係」のサブカテゴリーとして抽出されていた。また、「患者と会話ができず残念だった」とあり、今回は看護婦の後ろから看護婦の看護を介して患者を見るのではなく、患者と直接触れ合えるようにしたことで患者と話ができたり、患者に言われたことが嬉しかったり、もっと自然にコミュニケーションがとれるようにと目標が広がっている。

次に記述の多かったカテゴリーは、【患者－看護婦の信頼関係】である。2つのカテゴリーが示すように「患者－看護婦の信頼関係」の重要性に気づいている。「看護婦は患者が何を要求しているのかが自然とわかっている」や「看護とは身体的ケアだけでなく、心のケアも大切だ」と気づき、「患者の立場にたって、物事を考えることが必要だ」と患者－看護婦の信頼関係の形成に必要な要素に気づいている。こうした患者－看護婦間の関係を見ていて学生も「患者の気持ちを察することのできるナースになりたい、近づきたい」と考えている。このことから学生は、看護婦を介して患者を見ていたのではなく、自分の目で患者を見て判断していることがわかった。

前回は【看護婦と患者の関係】のカテゴリーで

患者—看護婦関係の重要性について気づいており看護者として信頼関係を成立させるにはという視点では考えているが、今回はそのことを踏まえて自分たちのめざしたい方向性まで示すことができていると考える。〈白衣とナースキャップの重みを実感できた〉には看護とは何かを問い続けている学生の姿が伺える。

4番目に多かったカテゴリーは【講義と実習との相違の実感】であった。約7割の学生が記述していることになる。講義と実習の相違については清拭や車椅子移動・リネン交換など具体的な体験によるものであった。

「清拭の体験をさせてもらって良い経験になった」や「リネン交換と車椅子移動をさせてもらった」と経験できたことに素直に喜んでいる状況から「技術が未熟で清拭や車椅子移動がうまくできなかった」や「いざとなるとできないことが多くあった」「車椅子での学習はしたはずなのに生かせなかった」など幾分悔しさのような気持ちとも受け取れるが、これも講義と実習との相違であろう。その段階から「応用させていかなければ、現場では対処しきれないんだ」とさらに「今学んでいることは重要で、援助の基本となるものだ」と実感している。単に講義と実習との相違の実感だけでなく、今学習していることの意味と関連づけて思考していると考ええる。さらに、これからの学習していく講義の動機づけとなる。このことは、筆者らがねらいとした一日実習の成果と考える。

前回では「技術体験をし、難しさがわかった」や「学生同志でやっていることと全く違う難しさがあつた」など類似の意見だった。

5番目に多かったカテゴリーは【学習目標の明確化】である。責任のある看護職、適切な判断とテキパキとした行動力、患者との信頼関係など学生たちが目指す看護職には厳しいものがある。

「自分なんてまだ未熟だ」ということに気づき、基礎的な知識を身につける必要性を感じ「今回の経験を生かし勉強したい」や「自分自身が勉強しないといけないのが見えた」など自己の学習目標が明確になったと考えられる。「ゆるみかかっていた自分の気持ちが引き締まった」と、患者や看護婦から大きな刺激を受け看護に対する考え方

の糸口をつかんでいる。

前回では【学習への意欲】というカテゴリーに分類されているが「知識・技術を見につけるようにならなりたい」や「学校での勉強にも意欲がでてきた」と一日実習による成果に他ならない。

6番目のカテゴリーは、【緊張と充実の実習】である。「初めての实習」に伴う緊張感を良い意味で体験しており、緊張イコール充実となっている。「時間を短く感じる充実した実習だった」、「初めての实習で疲れたけど楽しかった」、「学校での実習とは違う緊張感があり患者の重みを感じた」というような「楽しかった」の表現が18コードもあった。

前回では、「初めての实習で不安や緊張で精一杯だった」や「看護婦について行くだけで精一杯だった」、「思ったより疲れた」など迄で思考がとまっている。今回は、同じように疲れたと感じても「疲れたけど楽しかった」、「緊張したけど楽しかった」などその後に転移していることに注目したい。

7番目が【患者像のイメージの変化】のカテゴリーであった。前回の研究において、患者に関する記述が少ないことが課題であった。そこで今回は、午後の時間に直接患者と関われるように、しかも学生一人で患者のベッドサイドに行つて何らかの関わりが持てるよう臨床と協議を重ねた。その結果、「寝たきりのイメージが強かったがある程度のことはできる患者が多かった」とか「患者は入院生活の中でいろんな不安や悩みを持っている」、「患者は想像もつかないような病気を患っておりつらい治療にも耐えている」という今までと違ったイメージの変化が起きている。演習では学生同志の患者体験で患者の気持ちを理解しようとしていたが「演習では接することのない患者と接することができた」と表現しており、この患者との関わりについて「患者と接するのはその時々なので本当に貴重な時間で大切にしていかなければならない」と答えている。

学生は、わずかな時間で垣間みた患者の日常行動をはじめ、辛い治療にも耐えている患者の心理を推察し、学生である自分と会話して下さったことを「貴重な時間で大切に」と患者に感謝して

いる。学ぶ者として謙虚で真摯な姿勢を見せている。これは、誰かから聞くことでなく、誰かから伝えられたこととも違って自分が経験した実体験だからこそ意味があると考えられる。

続いて8番目のカテゴリーとして【カンファレンスによる共通理解】があがった。ここでは、カンファレンスにおける看護婦の取組みとして、看護婦は、患者の把握と自分の考えを伝達する能力を持つこと、また相手の意見も聴くことができ、人と情報を交換することが患者の共通理解につながると気づいている。

9番目は【看護婦からの指導】というカテゴリーである。今回は、学生一人に対して、看護婦一人の指導体制が整っている。61名の学生が一斉に実習ができ、1：1の体制がとれたのである。「看護婦さんの優しい説明や指導」と述べており、このカテゴリーだけでなく看護婦像や患者－看護婦関係についても影響が大きいと考える。

10番目は【配慮のある療養環境】というカテゴリーとなった。病院の設備は患者のことを配慮しており、さまざまな工夫を観察している。しかし患者や看護婦への関心の強さからコード数も少なかった。一つには、講義の進度との関係ともいえる。前回では「初めて大きな病院に行った」とか「病院の機能や仕組み、工夫に驚いた」とあり、今回より関心が高かったと言える。

最後の11番目のカテゴリーは【チーム医療の実際】である。コード数も一つであるが「栄養士や薬剤師などいろいろなスタッフが教えている」とあり、患者への支援はさまざまな医療チームによって行われていることを知る機会になっている。

2. 前回と比較しての相違

前回の課題を踏まえて実習方法を変更したところ、前回とは違った一日実習の効果が得られた。

1) 患者像の記述が増えている。看護者を介して見た患者だけでなく、実際に患者と話をしたり清拭や車椅子移動などの援助をとおして自らが体験したことを具体的に記述している。患者と直接関わることによって患者から得たものに変わっている。患者に励まされていることも次へ

のステップとなる。

2) 否定的な意見が少なくなっている。例えば前回では【看護の現実がみれた】のカテゴリーで「看護婦の仕事は汚く医者の下働きのイメージがあった」とか「不安や汚さで嫌になった」などネガティブな思いが少数ではあるが存在した。現実を直視する意味では初期の段階であるがままの臨床を感じることも無意味ではないが、次へのステップを踏み出すためには、そこで終わって欲しくない。「本当に自分が看護婦になれるのか不安になった」と不安が強くなった学生もいた。しかし今回には否定的な記述はなかった。

3) 患者と実際に話をして安心が得られている。

前は「患者と話ができず残念だった」とあったが今回にはみられなかった。しかし、患者と直接関わった学生はいずれも、「患者の生命力やがんばりに感動した」や「患者に言われたことがうれしかった」などと患者を身近に感じている。

4) 緊張はしているが充実している。

学生が初めての実習でいかに緊張と不安を抱いて望んだかが伺える。同じ緊張でも前は不安の強い緊張で、今回は緊張を快の感情として受け止めているように思える。

3. 基礎看護学一日実習の位置づけ

1) 看護学概論 I との関連

基礎看護学教育の初期段階として看護学概論 I において看護の基本となる理論について知識を幅広く習得していく。看護を学ぶにあたって、看護とは何かを要素ごとに考えていく。看護は何を目標に、誰に対して、どのような機能をしているのかを講義し、看護の対象の理解を深めていく。

この学習の過程で実施する一日実習は「患者や看護婦と接することで看護に対する考え方が見えた」や、「患者とコミュニケーションをとるのが難しかった」などの実体験から看護の対象を理解している。以上のことから、基礎看護学一日実習は看護学概論 I の講義目的を達成したり、今後の授業の動機づけになるなど一日実

習の意義は大きい。

3) 援助技術論Ⅱとの関連

日常生活援助を中心とする援助技術論では、対象のニーズに合わせた援助が必要である。学生は、自分たちが日常的に行っている行為を人に援助することは簡単なことと考えがちである。それは、各演習項目の中で、看護婦役・患者役を分担するが、お互いに協力してしまい、対象が援助を必要としていることが理解できていないことによると考えられる。

そこで一日実習を通して対象の生活状況を知ることは重要である。従って、「患者は想像もつかないような病気を患っており、つらい治療にも耐えている」にあるような対象に合わせた看護を学ばせたい。

4) 基礎看護学としての位置づけ

看護学概論Ⅰにとっても援助技術論Ⅱにとっても、一日実習による体験はそれぞれの科目を理解し、思考を深めることができる。学内での講義で看護の基礎を学習し、演習によりその方法を具体的に身につける。その知識や技術を統合させることで患者の前に立つことができる。そのことを、前回の研究と本研究によって検証

できた。その意味からも一日実習は看護学概論Ⅰと援助技術論Ⅱの両科目に関連性があるといえる。(図3)

さらに、この後に続いていく専門科目の講義や実習への動機づけになるなど意義は大きい。

中田らは⁵⁾、1年次の5月の病院見学実習と基礎看護学実習Ⅰとあわせて1単位とした科目構成をとっている。このように、一日実習を科目に位置づけたカリキュラムの報告は他にもある。

本学においても一日実習が単なる見学実習に終わるのではなく、基礎看護学のカリキュラムに位置づけることは意義深いことだと言える。

VI. 結 論

1) 一日実習の感想としてもっとも関心の高かったのは、「看護婦の魅力と役割の認識」だった。

学生は看護婦の一挙一動から知る看護について患者の安全と適切な判断とテキパキした行動力をとる責任のいる仕事だと認識していた。

2) 「コミュニケーションの体験」が2番目に多

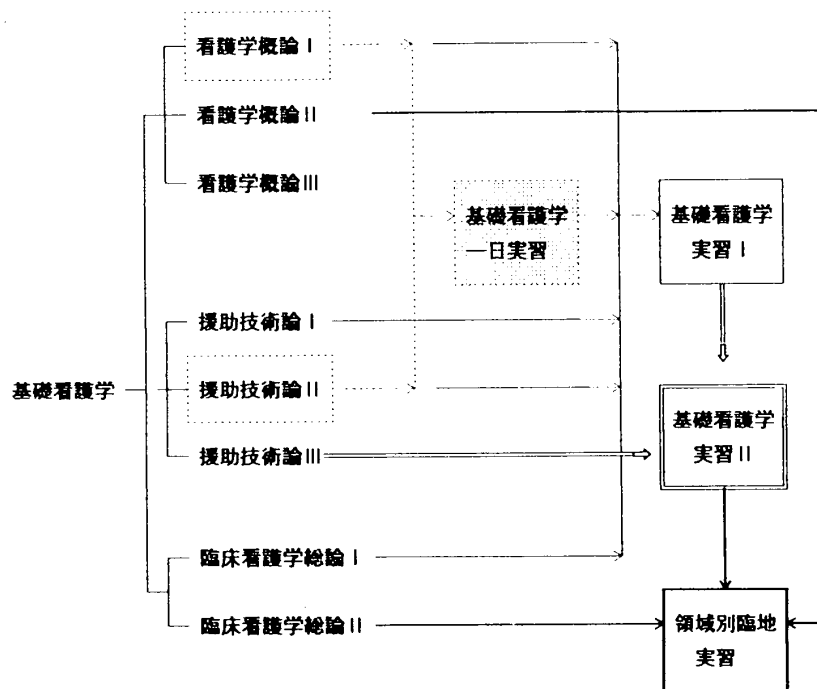


図3. 基礎看護学一日実習の位置づけ

かった。

学生は、患者－看護婦の会話をみて「患者は看護婦と会話しているときとても嬉しそう」と患者の表情も捉えている。そして、学生自身も患者と会話することでコミュニケーションの難しさと「患者と話ができてよかった」と素直に喜び、もっと自然にコミュニケーションがとれるようになりたいと前向きな姿が伺えた。

- 3) 実習内容を意図的に直接患者と関わることに主眼をおくと患者の記述が増えてきた。

寝たきりのイメージから患者の自立を促すことに気づき、「入院生活の中でいろいろな不安や悩みを抱えている」人や「想像もつかない病気を患っており辛い治療に耐えている」患者の心理を推察している。

- 4) 今回は否定的な感想の記述はなかった。

前回は、「看護の仕事は汚い」や「看護婦になることへの不安」などネガティブな思いをした学生がいた。今回には否定的な感想の記述はなかった。むしろ、患者から言われたことが嬉しかったと感動している。

- 5) 前回の研究と本研究において、基礎看護学一日実習の効果が明らかとなり、一日実習を基礎看護学の科目としてカリキュラムの中に位置づけることは意義深い。

引用・参考文献

- 1) 杉本幸枝他：基礎看護学一日実習における効果と課題－学生の実習記録の内容分析を通して－，新見女子短期大学紀要，第19巻，P139－148，1998
- 2) 野崎真奈美：初めての臨床実習において看護学生が看護への動機づけを高めた状況の分析，第30回日本看護学会看護教育，看護協会出版会，P44－45，1999
- 3) 石井くみ子他：見学実習の対象・看護の学びの検討－実習記録の分析から－第30回日本看護学会看護教育，看護協会出版会，P12－14，2000
- 4) 石本傳江他：援助技術論ワークブック，大空社，1999
- 5) 中田芳子他：人間理解を基盤に科目間の連携をはかる－基礎看護学カリキュラム案とその展開－新カリキュラム展開のガイドブック，医学書院，1997
- 6) 田島桂子：看護教育評価の基礎と実際，医学書院，1989
- 7) 石井八重子・長吉孝子：看護概念の把握および看護技術への学習効果を期待して，新カリキュラム展開のガイドブック，医学書院，1997
- 8) 波多野梗子・小野寺杜紀：系統看護学講座Ⅰ，看護学概論，医学書院，2000
- 9) 青木康子：新カリキュラム展開の手引き，日総研出版，1992
- 10) 清水好子：初回臨床実習における学生の患者理解〈Ⅰ〉，看護展望，15(7)，P68－73，1990
- 11) 清水好子：初回臨床実習における学生の患者理解〈Ⅱ〉，看護展望，15(8)，P82－88，1990